

報告：ドイツ語圏日本語教師会パネル・ディスカッション — ドイツ語圏の日本語教育を見つめ直す —

(Bericht: Podiumsdiskussion mit Vereinen von Japanischlehrenden im deutschsprachigen Raum: Neue Perspektiven auf den Japanischunterricht im deutschsprachigen Raum)

濱田朱美 Hamada, Akemi

(ドイツ語圏大学日本語教育研究会 Japanisch an Hochschulen e. V.)

小出和泉 Koide, Izumi (ドイツ VHS 日本語講師の会

Verein zur Förderung des Japanisch-Unterrichts an VHS e.V.)

三輪聖 Miwa, Sei (ドイツ VHS 日本語講師の会

Verein zur Förderung des Japanisch-Unterrichts an VHS e.V.)

グリーセル アレクサンダー Griebel, Alexander

(ドイツ語圏中等教育日本語教師会 Verein der Japanischlehrkräfte
an weiterführenden Schulen im deutschsprachigen Raum e.V.)

マダドナーめぐみ Maderdonner, Megumi

(オーストリア日本語教師会 Der Verband der Japanisch-Lehrer in Österreich)

ミューレバツハ名倉千春 Nagura Mühlebach, Chiharu

(スイス日本語教師の会 Verein der Japanisch-Lehrkräfte in der Schweiz)

東健太郎 Azuma, Kentaro (国際交流基金関西国際センター

The Japan Foundation Japanese Language Institute, Kansai)

高橋淑郎 Takahashi, Yoshio (ミュンヘン大学 LMU München)

要旨 / Zusammenfassung

本稿では、第 30 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムにおいて開催された教師会パネル・ディスカッション（以下、「本パネル」）の内容を報告する。

ドイツ語圏には国別に教師会があり、ドイツ国内はさらに、成人教育、中等教育、高等教育という機関別に教師会が分かれているが、お互いの間には普段あまり交流がなく、その結果、この地域における日本語教育の全体像が見えにくくなっている。そこで今回、ドイツ語圏で活動する 5 つの教師会がそれぞれ設立から 30 年前後を迎えるのを好機として、各会の代表者が一堂に集まってお互いの活動を紹介し合い、参加者とともに現状と課題について対話する場として、本パネルを開催することとした。具体的には、まず、各教師会の代表者にそれぞれの会の活動を紹介してもらい、それについて全体でディスカッションしたのち、最後に日本語教育専門家からまとめのコメントをしてもらった。

本稿では、以上の内容の詳細を報告するのに加え、本パネル後に行ったアンケート調査をもとに参加者の声も紹介し、それをふまえて本パネルの意義と今後の課題を提示する。

Dieser Beitrag berichtet über den Inhalt der Podiumsdiskussion mit den Vereinen von Japanischlehrenden im deutschsprachigen Raum (im Folgenden „das Podium“), die im Rahmen des 30. Symposiums des Vereins „Japanisch an Hochschulen e. V.“ veranstaltet wurde.

Im deutschsprachigen Raum gibt es in jedem Land Vereine von Japanischlehrenden. In Deutschland sind diese zudem nach Institutionstypen unterteilt: Erwachsenenbildung, Sekundarbildung und Hochschulbildung. Zwischen diesen Organisationen findet jedoch bis heute nur wenig Austausch statt, was zur Folge hat, dass das Gesamtbild des Japanischunterrichts in dieser Region schwer zu erfassen ist. Vor diesem Hintergrund wurde diese Podiumsdiskussion veranstaltet: Anlass war, dass fünf im deutschsprachigen Raum aktive Vereine jeweils auf rund 30 Jahre Bestehen zurückblicken konnten. Dort stellten zunächst die Vertreter*innen die Aktivitäten ihrer jeweiligen Vereine vor, über die anschließend eine Gesamtdiskussion geführt wurde, bevor abschließend ein Japanese-Language Senior Specialist des Japanischen Kulturinstituts Köln zusammenfassende Kommentare abgab.

Neben der detaillierten Darstellung der Inhalte der Podiumsdiskussion stellt dieser Beitrag auch die Ergebnisse einer im Anschluss im Podium durchgeführten Umfrage unter den Teilnehmenden vor. Auf der Grundlage all dieser Inhalte werden abschließend die Bedeutung des Podiums sowie zukünftige Aufgaben und Herausforderungen aufgezeigt.

1 はじめに

高橋淑郎

2024年3月1日～3日、第30回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウムがIBZ München¹にて開催された。本稿は、シンポジウム2日目の3月2日(土) 9:00～12:00に行われた「教師会パネル・ディスカッション——ドイツ語圏の日本語教育を見つめ直す」(以下、「本パネル」と略称)の報告である。

本パネルの背景と目的は以下のとおりである²。

ドイツ語圏には国別に教師会があり、ドイツ国内はさらに、成人教育、中等教育、高等教育という機関別に教師会が分かれているが、お互いの間にはほとんどあまり交流がない。その結果、この地域における日本語教育の全体像が見えにくくなっている。

そこで今回、これらの5つの教師会が設立から30年前後を迎えるのを好機として、それぞれの代表者が一堂に集まり、お互いの活動を紹介し合い、参加者とともに現状と課題について対話する場を設けることとした。

このパネル・ディスカッションの目的は、まず、ドイツ語圏の日本語教育の全体像と多様性を明らかにした上で、複数の教師会に共通する課題と、各地域・機関に固有の課題を整理することである。次に、そうした課題に対して、これから、複数の教師会がどのように連携・協力、あるいは、役割分担するのがよいかを探ることも重要な目的である。さらに、議論を通して、各教師会がそれぞれの地域・領域においてどんな役割を果たしているか、また、それが一

1 Internationales Begegnungszentrum der Wissenschaft München e. V. が運営する研究者交流施設。住所は Amalienstraße 38, 80799 München.

2 以下の引用は、本シンポジウムのプログラムに「パネル・ディスカッションの背景と目的」という標題で掲載された文章の全体である。執筆は「第30回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム実行委員会(加藤由実子・村田裕美子・高橋淑郎。いずれもミュンヘン大学所属)」である。

人ひとりの教師にとってどんな意義を持っているか、ということがより深く理解できるようにしたいとも考えている。

以上の目的のもと、ドイツ語圏で活動する 5 つの教師会から合計 6 名の代表者をパネリストとして迎え、さらに、ディスカッションの締めくくりとなるコメントを国際交流基金ケルン日本文化会館日本語上級専門家（当時）³の東健太郎氏にお願いした。司会はシンポジウム実行委員長の高橋淑郎が担当した。登壇者氏名は以下のとおりである。

パネリスト：

ドイツ語圏大学日本語教育研究会会長（当時） 濱田朱美氏

ドイツ VHS 日本語講師の会会長 小出和泉氏

ドイツ VHS 日本語講師の会会員 三輪聖氏

ドイツ語圏中等教育日本語教師会会長（当時） アレクサンダー・グリーセル氏
オーストリア日本語教師会会長 マダドナーめぐみ氏

スイス日本語教師の会会長 ミューレバッハ名倉千春氏

コメンテーター：国際交流基金ケルン日本文化会館（当時） 東健太郎氏

司会：高橋淑郎

当日は、司会がまず本パネルの背景と目的を簡単に紹介したのち、教師会代表者がそれぞれの教師会の活動について 15 分ずつ紹介した（順番は上記の登壇者リストのとおり）。その後、聴衆から質問用紙を回収・集計し、短い休憩ののち、登壇者と聴衆を含む全体でディスカッションの時間を設け、それに続いてコメンテーターがコメントを発表した。最後に司会が短いまとめを行った。

本稿も基本的にこの段取りのとおり構成されている。まず、本章（第 1 章）が本パネルの背景・目的と概要、第 2 章が各教師会の活動紹介、第 3 章がディスカッションのまとめ、第 4 章がコメンテーターによるコメントである。さらに、第 5 章では本パネル後に行ったアンケート調査をもとに参加者の声を紹介し、最後の第 6 章では本稿のまとめとして、本パネルの意義を評価する。

2 各教師会の活動紹介

教師会代表者には、各教師会について、会員の背景・数、発足年、ふだんの活動、うまく行っている点と課題を中心に 15 分ずつ話していただいた。本章では、当日の資料をもとにした原稿を各代表者に執筆いただいた。順番は当日と同じである（以下、敬称略）。

3 現在の所属は国際交流基金関西国際センター。

2.1 ドイツ語圏大学日本語教育研究会 / Japanisch an Hochschulen e.V. (JaH)

濱田朱美

2.1.1 Japanisch an Hochschulen e.V. について

Japanisch an Hochschulen e.V. はドイツの Ludwigshafen に社団法人として登記されている団体で、日本語の名称は「ドイツ語圏大学日本語教育研究会」である。通常ドイツ語名を省略し、“JaH”と呼ばれている（以下この略称を使用する）。

JaH は 1994 年に発足した。そのきっかけとなったのは、80 年代後半からケルン日本文化会館の呼びかけで日本語教師を集めての勉強会が開かれたことだった。勉強会を重ねる中、ネットワークが広がっていき、ドイツ語圏では中等教育、VHS、高等教育の三つにグループが分かれ、それぞれが教師会を立ち上げることとなった。

会の目的は法人の定款を引用すると、「ドイツ語圏における日本語の普及、並びに高等教育機関の日本語授業のための、教授法および教材の更なる研究を目的とする。」となっている（定款第二条より抜粋）。

2.1.2 会員

2024 年 1 月現在の会員数は、71 名で、会員の背景は大きく二つに分かれると言える。まず第一のグループはドイツ語圏の大学に従事している（していた）会員で、更に三つの小グループから成る。

- a) 日本学で日本語を教えている、または教えていた。
- b) 言語センターなど全学対象の機関で日本語を教えている、または教えていた。
- c) 経済学や工学など日本学以外の学科で日本語を教えている、または教えていた。

会員の中で現役でドイツ語圏の大学で教えている割合をグラフに表すと図 1 のようになり、「日本学：言語センター：その他」の学科の人数はそれぞれ 31 人、10 人、2 人となっている。

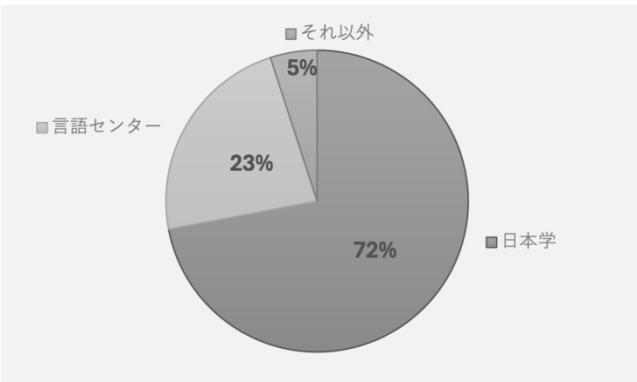


図 1 ドイツ語圏の大学で日本語を教える会員の割合

第二のグループはそれ以外の会員で、こちらも更に三つに分けられるが、多くはない。

d) 日本でドイツ語を教えていて、ドイツ語圏の日本語教育との交流が深い

e) ドイツ語圏の大学以外で日本語教育を主な研究の場とし、ドイツ語圏でも深い関わりがある

f) ケルン日本文化会館の日本語教育専門家

2.1.3 会の活動

会の主な活動には次のものがある。

- ・総会（年1回）
- ・シンポジウム（年1回）
- ・紀要（おおよそ隔年）
- ・情報交換会（年2回）
- ・MLによる情報交換
- ・役員会（年2回）

2.1.3.1 シンポジウム

1994年にビーレフェルト大学で第一回目のシンポジウムが開催され、今回で第30回目を迎えた。毎回会員が所属する教育機関を開催地として、持ち回りで開催校を決めている。各シンポジウムのテーマと開催校については、JaHのホームページで確認していただきたい。（<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/d-index.php>）

2.1.3.2 紀要 „Japanisch als Fremdsprache“

JaHの紀要はISSN番号を持つ学術雑誌で、2009年に第一号が出版された後は、だいたい隔年で出版されている。第八号の出版は今年（2024年）を予定している。

会員が発表できる場を模索していた当時、非営利株式会社ビッグ・エス インターナショナルより助成を受けられることになったことが出版のきっかけとなった。会員の山守氏の尽力により、当時の会長大島ゲーリッシュ氏、そして、第一号の編集委員長である的場氏の下、第一号が出版された。内容はシンポジウムの際の会員発表を論文にまとめたものと、それ以外の会員による研究論文、実践報告となっており、査読がある。

また、2021年には国立国語研究所の図書館にも1から7号を寄贈し、検索できるようになった。JaHホームページ上でもPDFで自由にダウンロードできるようになっている。

2.1.3.3 情報交換会

情報交換会は現在のところ年に二回ほどオンラインで実施している。会員なら誰でも自由に参加できる。

2020 年の新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、会員のほとんどが突然オンライン授業をしなければならない状況に陥った。そのような中、複数の会員が自発的にオンラインで数回勉強会を実施し、助け合いと学び合いの活動が活発になったという土台があった。その一方で、2021 年 3 月にボーフム大学で予定されていたシンポジウムの実施変更を余儀なくされた。シンポジウム実行委員長のハンゼン氏にテーマの変更について相談を受け、「日本語オンライン授業の現状と将来」に変更した。その前準備という形で、ハンゼン氏が 2020 年の 9 月に「デジタル授業について」というテーマでの情報交換会を提案してくれたことが第一回目の実施に繋がった。

現在まで 5 回の情報交換会を実施したが（表 1 参照）、テーマはほとんど会員同士のちょっとした雑談に端を発しており、そこから役員を中心に企画と運営をやっている。会員の誰かが中心となり実践について話すこともあれば、参加者のおしゃべりの場となることもある。参加人数はその時によって様々だが、今のところ関心を持ってくれる会員が一定数いるようだ。

情報交換会は会の活動としては歴史が浅いが、一年に一回シンポジウムで会う以外に会員同士のつながりが深まる機会となり、会の活動がより活発になっていると言える。

表 1 これまでの情報交換会

第 1 回（2020 年 9 月）：	デジタル授業について（参加者 23 名）
第 2 回（2022 年 5 月）：	留学・留学業務について（参加者 9 名）
第 3 回（2022 年 12 月）：	漢字学習について（参加者 22 名）
第 4 回（2023 年 6 月）：	機械翻訳のツールなどをどのように勉強・授業に活かすことができるか（参加者 19 名）
第 5 回（2023 年 12 月）：	新学期どう？評価と試験どうしてる？（参加者 17 名）

2.1.4 会としてよく機能している点

JaH は会の規模がそれほど大きくないため、会員の状況把握がしやすく、会としてうまく機能している。会員同士もお互い顔と名前が把握できる、ちょうどいい規模だと言えよう。上述した通り、情報交換会を始めたことにより、会の活動がより活発になっている。また、役員会のメンバーが交代しても常に役員会はよく機能している。他の教師会も同じであろうが、役員はそれぞれ仕事やプライベートの傍ら責任をもって、無報酬で会を支えている。小さい会なので、会員の誰かがいつか一度は役員として会を支えることになる。また、ほとんどの会員が役員となることで、会の運営状況を誰もがよく把握できていると思う。

2.1.5 会としての課題

会として最も難しいことは、シンポジウム開催校を決めることだと言える。ドイツ語圏の日本学に縮小傾向が見られる中、人員不足や会場確保の問題があり、物理的に引き受けることが難しいところがある。役員会が打診しても断られるケースが少なくないのが現状である。

これまで残念ながら他の教師会との横のつながりがほとんどなかった。設立の過程からドイツ語圏では教育機関別に三つの教師会が分かれて存在しているため、教育機関の垣根を超えたレベルでの日本語教育に関する議論が起こりにくく、どちらかというと同じ環境にいる人の間での情報交換に価値が置かれている。しかし、ドイツ語圏における大学での日本語教育のこれからを考えるのであれば、大学関係内と教育機関の垣根を超えたレベル、この双方の「持続的な」議論が必要になってくるのではないだろうか。また、ドイツ語圏のオーストリア、スイスの教師会とのつながりもほとんどなかったので、今回のシンポジウムで各教師会が集い知り合う機会が設けられたことにより今後お互いに交流が活発化するであろう。

課題とは言えないが、ここ数年総会や役員会で話し合われたキーワードの一つに会員の条件がある。現状では会員になる条件は「正会員はドイツ語圏の高等教育機関の日本語教員とする。この規定の例外については、理事会が決定する。」となっている（定款第四条二項）。近年この「例外」扱いで、役員会で承認され会員になった方々もいる。ドイツ語圏の高等教育機関で日本語教育に携わっていない会員が増えることで、新しい風を取り入れられる一方、本来の会の目的に沿った会員が少数派にならないように、会の内外の人にとって明確で分かりやすいスタンスが必要であろう。

上述した情報交換会について、これまでは主に役員が企画運営しているが、役員主導のものだけでなく、会員発の勉強会や情報交換会ができていくことを希望する。

2.2 ドイツ VHS 日本語講師の会 / Verein zur Förderung des Japanisch-Unterrichts an VHS e.V. (VJV)

小出和泉・三輪聖

2.2.1 ドイツ VHS 日本語講師の会と VHS（ファウ・ハー・エス）

1992 年 4 月、第 1 回研修会を機に設立された当会は、主にドイツの Volkshochschule（以下 VHS）で日本語教育に携わる講師への教育活動支援、会員間および他機関との情報交換の場の提供、日独文化交流への貢献を目的に活動を行っている。VHS は従来、成人を対象にした非営利の「生涯教育」機関であり、日本語では「市民大学」と訳される。全国に点在する約 3000 の拠点を中心に、年

に約 70 万のコースが開講されており⁴、語学のほか、料理や哲学など多岐にわたる分野のコース、大学入学資格試験（Abitur）準備コース、識字コースなど、プログラムの内容は様々である（ドイツ VHS 日本語講師の会、紀要 VJV フォーラム 17 号参照）。

VHS は主に市町村の地方自治体が管理にあたっているため、全国で開講されている日本語講座の正確な数を把握することは困難であるが、ミュンヘン市が運営する Münchner Volkshochschule の報告によれば、2023 年 9 月から 2024 年 3 月までの間に Münchner Volkshochschule に登録された日本語講座は 41 コースであり、そのうち実際に開講された講座は 33 コースであった。また登録者は約 300 名であったという。現在では若年層の受講者も増加しており、昨年末、今回のパネル・ディスカッションに向け行った会員アンケートの結果（回答 39 名）⁵を見ると、小学生から年金受給者まで、幅広い年代の学習者が VHS を通じて日本語を学んでいることが確認できる。主な学習目的には「旅行や出張等、日本へ行く予定がある」「日本文化への興味・関心」「言語への興味・関心」が挙げられている。

2.2.2 所属会員

現在当会は 118 名（2024 年 3 月時点）の会員を有しているが、会員の所属は居住地域によって 5 つの支部（バーデン＝ヴュルテンベルク州、バイエルン州、中央ドイツ支部、北ドイツ支部、ノルトライン＝ヴェストファーレン州）に分けられている。年末実施した会員アンケートの結果によると、VHS 以外にも大学や個人授業、補習校など、様々な機関で日本語教育に従事している者が多い。提供しているコースの内容も多岐にわたり、初中級レベルの日本語や、旅行のための日本語、継承語としての日本語などが例として挙げられる。当会への加入理由としては「日本語教育に関する情報収集」「より良い授業にするヒントを得るため」との回答が多かった。

2.2.3 会の活動

2.2.3.1 運営視点

会の活動には、年に 1 度の合宿型全国研修会、州支部の研修会や勉強会、会員への情報配信や紀要 VJV フォーラムの発行などが含まれる⁶。州支部の研修会や勉強会は 5 つの支部が各々企画しており、テーマや進め方も各支部に委ねられて

4 Deutscher Volkshochschul-Verband, “Anzahl der Volkshochschulen und Außenstellen in Deutschland“, <https://www.volkshochschule.de/verbandswelt/volkshochschulen/volkshochschulen.php#&gid=1&pid=1>, アクセス日: 2024 年 1 月 3 日。

5 アンケート結果は本報告書に適宜使用した。

6 2024 年に開催された総会において、全国定例研修会の報告書と紀要を統合する方針が決議された。

いる。さらに、会の運営に関わる活動として、総会や役員会議、「州・支部代表会議」が存在する。「州・支部代表会議」は比較的新しく設けられた制度で、総会で扱えなかった議題を取り扱う場、また州支部代表間の情報交換の場の提供を目的としている。

2.2.3.2 会員視点

本稿では、ベルリン・ブランデンブルク州支部と北ドイツ支部を例に、州支部代表の主な活動を紹介する。各州に州代表が1人、支部によっては副代表もいる。発表者が州代表として行っていた活動は以下の通りである。

- ・ 州・支部代表会議への参加
- ・ 州支部「総会」（州支部運営状況の報告、会員交流）の開催
- ・ 勉強会の発足、企画・運営（毎月1回）
- ・ 州・支部研修会（毎年1回）の企画・運営
- ・ 全国定例研修会の企画・運営（担当州になった時に実行委員として実施）

2.2.4 うまく行っている点と課題

2.2.4.1 運営視点

運営面でうまくいっている点として、以下の項目が挙げられる。1) 州・支部代表会議の設置により、役員と州代表の連携が強化できている点、2) 全国定例研修会に加え、州支部の研修会や勉強会が開催されており、さらにオンライン化によって学びの機会が充実している点、3) 多様な背景を持つ会員が集まっているため、新たなネットワークが築きやすい点、4) 運営方法が整備され、会の動きが可視化された点である。一方、活動に参加する会員が固定化されていることや、その影響で一部の会員に負担が偏るという課題もある。こうした課題に対応するため、より多くの会員が気軽に参加できる交流の場を設けること、また「役員→州支部→会員」というピラミッドの構図ではなく、会員の中に州支部や役員会があることを意識し、運営に取り組むことが重要であると考え（図2参照）。

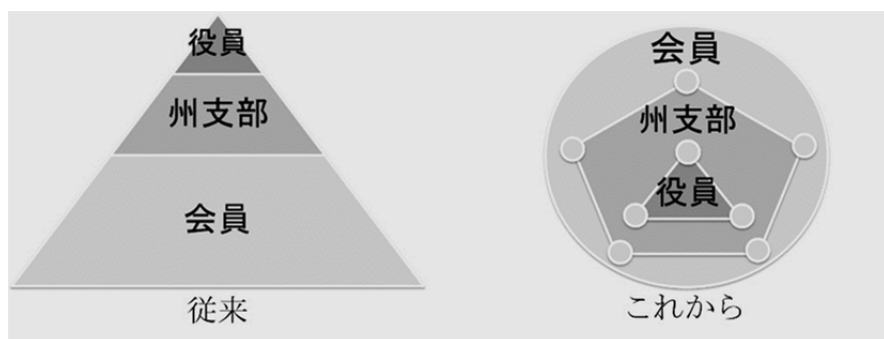


図2 従来とこれから期待される教師会の構図

2.2.4.2 会員視点

当会には「州支部」単位で活動するシステムが根付いており、会の活動が活発になっている。ただ、いくつかの州支部が統合された結果、地理的にずいぶん離れた地域の人と共に活動をすることになり、協働が難しくなった事例もある。しかし、現在はオンラインでのコミュニケーションが盛んに行われるようになり、問題は解決しつつあるように思う。

さらに、州支部の代表が集まる会議を通して、州支部間の情報交換がしやすくなっただけでなく、会の運営システムとして会員同士や会員と役員が繋がるための道筋が整備されたと言える。

難しいと感じる点は、輪番制のシステムである。毎年一回行われる全国定例研修会や紀要の担当がタイミングをずらしてそれぞれの州に回ってくるのだが、会員には様々なスタンスや目的を持って入会をした人がいるため、紀要や研修会の担当が回ってくることを負担に感じる人もいる。また、州支部によって会員数も異なるため、小規模な支部には大きな負荷がかかってしまうことも事実である。

2.2.5 まとめ

ドイツ VHS 日本語講師の会は、州支部単位で組織化されていることで、各会員が主体的に行動しやすいという特徴が挙げられる。また、様々な分野で活躍する会員が集うことで、自然と新たなネットワークが生まれている点も特色の一つである。オンライン化が進む現在、会の活動形態も変化の過渡期のように感じるが、今後とも会員同士が交流し繋がる基点として、より良い環境を整えていきたい。

2.2.6 質問と回答

Q1: VHS では主にどのような教科書が使われていますか。

A1: 会員に行ったアンケートでは、『まるごと』が一番多く 76.9%、次に『みんなの日本語』 23.1%という結果になりました。

Q2: 研修会が 3 月で JaH とほぼ重なるので、いつも参加をあきらめています。

A2: ドイツ語圏大学日本語教育研究会（JaH）とは事前に連絡を取り合い、日程が重ならないよう調整しています。オンラインの研修会も増えたので、ホームページの研修会情報を確認していただけると嬉しいです。

Q3: 新しい会員発掘の活動/PR は考えていますか。ドイツ東部にも日本語を教えている VHS がありますか。

A3: 州支部の勉強会は（全ての州支部がそうしているわけではありませんが）その地域の非会員の方々にも広報をしており、まずは勉強会にお越しいただき、徐々に会の活動を知ってもらうことから始めようというスタンスで行なっているケースがあります。勉強会を通して会の活動の意義を感じてもらえたら入会を検

討していただけるのではないかと思います。それに加えて、やはり JaH や VJS などの他の教師会との「重なり」を作っていくことで、VHS 以外のフィールドで（も）教えている人に当会の活動を知ってもらえるようになると思います。今後、教師会の間で交流を持ち、何らかの「重なり」や「接点」を作っていけたらいいのではないのでしょうか。

2.3 ドイツ語圏中等教育日本語教師会 / Verein der Japanischlehrkräfte an weiterführenden Schulen im deutschsprachigen Raum e.V. (VJS)

Alexander Griebel

Der Verein der Japanischlehrkräfte an weiterführenden Schulen im deutschsprachigen Raum (kurz: VJS e.V.) wurde am 6. März 1993 mit dem Ziel gegründet, den Japanischunterricht als Teil der fremdsprachlichen Fächer im deutschsprachigen Schulunterricht zu fördern und weiterzuentwickeln. Er wird hauptsächlich von Japanischlehrer:innen an deutschsprachigen Schulen organisiert. Zu den Aktivitäten des Vereins gehören die Entwicklung und Evaluation von Lehrmethoden im Bereich der japanischen Fachdidaktik, die Entwicklung von Unterrichtsmaterialien, die Förderung des Jugendaustausches zwischen Japan und den deutschsprachigen Ländern durch Korrespondenz, Gastaufenthalte, Schulreisen und Austauschprogramme, die Zusammenarbeit und der Austausch mit anderen relevanten Organisationen und Institutionen, die Planung verschiedener Veranstaltungen im Rahmen des Japanischunterrichts an Schulen, die Planung und Organisation von Workshops für Japanischlehrer:innen sowie der Informationsaustausch über die aktuelle Situation und die Probleme der am Japanischunterricht beteiligten Personen und Institutionen und Zusammenarbeit bei der Lösung von Problemen.

Seit der Gründung des Vereins haben bereits 33 Fortbildungsseminare stattgefunden. Während der Einschränkungen durch die Corona-Pandemie wurden zwei Online-Seminare durchgeführt. Die jährlichen Fortbildungsseminare finden an einem Ort in Deutschland an einem Wochenende, von Freitag bis Sonntag, statt. Sie werden von einem oder mehreren lokalen Mitgliedern und dem Vorstand organisiert und durchgeführt.

In Zusammenarbeit mit dem Japanischen Kulturinstitut in Köln (Japan Foundation), dem Sakura Network, dem Japanischen Generalkonsulat in Deutschland und der Japanischen Botschaft in Berlin konnte der Verein bereits eine Reihe von interessanten Seminaren organisieren. Die Seminare werden auch unter der Mitwirkung der Mitglieder organisiert, die über ihren Unterrichtsalltag und ihre außerschulischen Projekte berichten. Unterstützt wird der Verein durch informative Vorträge von deutschen und japanischen Wissenschaftlern.

第	日程	1988 年 7 月	
一	開催地・会場	Bolanden-Weierhof / Weierhof Gymnasium	
回	テーマ	・ 教案の作り方 ・ 日本語教材のいろいろ ・ テスト・試験と評価 ・ 日本事情の教え方	
	招聘講師	早稲田大学日本語研究教育センター	川本 喬 教授
		筑波大学文芸・言語学系	石田 敏子 教授
第	日程	1996 年 10 月	
八	開催地・会場	Berlin / Heimvolkshochschule Jagdschloß Glienicke	
回	テーマ	言語モデルとしての教師の役割	
	招聘講師	産能短期大学日本語教育研究室	鬼木 和子 助教授
第	日程	2009 年 6 月 12 日～6 月 14 日	
二	開催地・会場	Bad Orb / Evangelisches Bildungszentrum (ebz)	
十	テーマ	コミュニケーションに基づいた異文化理解能力: そのための言語能力・ノンバーバルコミュニケーション能力の訓練	
一	招聘講師	早稲田大学大学院日本語教授法研究	川口 義一 教授
回		Stuttgart	Anneliese Zorn

第	日程	2016 年 7 月 8 日～7 月 10 日	
二	開催地・会場	ルードビヒスハーフェン経済大学	
十	テーマ	デジタル時代の日本語教育	
八		Japanisch-Unterricht im digitalen Zeitalter: Soziale Interaktionen und Technologien im Internet	
回	招聘講師	ルードビヒスハーフェン経済大学	Christine Liew 宮嶋砂人
第	日程	2018 年 6 月 8 日～6 月 10 日	
三	開催地・会場	Arbeitnehmerzentrum Königswinter (AZK)	
十	テーマ	Aktuelle Tendenzen in der japanischen Schullandschaft 日本の学校の現状	
回	招聘講師	デュッセルドルフ大学 デュッセルドルフ日本人学校教頭	Dr. Stephanie Osawa 佐藤美加
第	日程	2019 年 6 月 1 4 日～6 月 1 6 日	
三	開催地・会場	Jugendherberge Bad Homburg	
十	テーマ	Digitale Medien im Japanisch-Unterricht	
一	招聘講師	Fachleiterin für Englisch und Französisch Göthe-Universität Frankfurt	Dr. Alexandra Knöll 酒井洋一
回			

図 3 研修会記録の例

Der Verein hat in der Regel ordentliche Mitglieder aus dem Bereich der berufstätigen Japanischlehrer:innen, lädt aber auch Einzelpersonen, Gruppen und Institutionen, die mit den Zie-

len und Aktivitäten des Vereins übereinstimmen, zur direkten und indirekten Unterstützung und Zusammenarbeit bei der Entwicklung des Japanischunterrichts als Fördermitglieder ein. Derzeit hat der Verein etwa 50 Mitglieder, die fast alle als Lehrer:innen an weiterführenden Schulen in Deutschland tätig sind. Etwa 25 % der Mitglieder sind japanische Muttersprachler:innen, die in Japan geboren wurden, während 75 % deutsche Muttersprachler:innen oder Deutsche mit japanischen Eltern sind. Der Anteil der japanisch-stämmigen Mitglieder ist in den letzten Jahren zurückgegangen, da Lehrer:innen aus nordrhein-westfälischen Lehramtsstudiengängen mit Deutsch als Erstsprache dem Verein beigetreten sind.

Als Stärken des Vereins sind insbesondere die Planung und Organisation von Fortbildungsseminaren für Japanischlehrer:innen, die Werbung neuer Mitglieder für den Japanischunterricht zukünftiger Generationen sowie die Vernetzung der Mitglieder trotz unterschiedlicher Bundesländer und unterschiedlicher Bildungssysteme zu nennen.

Die Herausforderungen, die sich der Verein zu stellen hat, betreffen vor allem die Weiterentwicklung und Evaluation von Lehrmethoden im Bereich der japanischen Fachdidaktik, Lehr- und Unterrichtsmaterial für die aktuelle Generation von Schüler:innen der Mittel- und Oberstufe zur Vermittlung des aktuellen Japans und der japanischen Sprache. Ebenso stellen die Etablierung und der Erhalt des Unterrichtsfaches in Bundesländer außerhalb Nordrhein-Westfalens eine Herausforderung dar. Die knappen personellen Ressourcen, die bildungspolitischen Gegebenheiten in den Ländern sowie die lückenhafte Datenlage stellen sich dabei als Hemmnisse dar.

In der anschließenden Fragerunde wurden weitere wichtige Punkte angesprochen, die sich grob drei Themengebieten zuordnen lassen: Konkrete Gestaltung des Japanischunterrichts an weiterführenden Schulen, fachdidaktische und schulformbezogene Fragestellungen sowie Möglichkeiten der Kooperation verschiedener Vereine und Institutionen mit Japanbezug. Konkrete Ausführungen würden den Rahmen dieses Beitrages sprengen, allerdings sei erwähnt, dass in zukünftigen Runden dieser Art diese Fragestellungen ausführlicher diskutiert werden sollten, um ein tiefergehendes Verständnis für den Japanischunterricht an Schulen zu erhalten. Das System Schule unterscheidet sich in seinen Voraussetzungen und Vorgaben stark von der universitären Bildung oder der Erwachsenenbildung an Volksschulen. Diese Unterschiede bewirken, dass man sich bei der Planung und Durchführung des Japanischunterrichts sprichwörtlich in unterschiedlichen Welten befindet, was einen Austausch darüber zwar nicht einfach, dafür aber spannend für alle Beteiligten macht. Auf dem Symposium konnte ich diese Atmosphäre spüren, die von Neugier und großem Interesse für den Japanischunterricht an weiterführenden Schulen geprägt war.

Im Folgenden führe ich einige Fragen an, die während der Podiumsdiskussion nicht ausführlich besprochen werden konnten. Diese können für kommende Diskussionen sicherlich interessant sein.

- Auf welche Art und Weise organisieren Sie Arbeitsgemeinschaften zum Thema Japan an Ihren Schulen bzw. welche Vorgaben gibt es dafür?
- Welche Lehrwerke werden im schulischen Japanischunterricht eingesetzt?
- Wie können weitere Institutionen mit Japanbezug bei der Erarbeitung von Lehrmaterialien behilflich sein?
- Wie entwickeln sich die Schülerzahlen für den Japanischunterricht an Schulen und was kann man tun, um diese zu erhöhen?

- Welche weiteren Möglichkeiten der Zusammenarbeit mit anderen Institutionen sehen Sie, um in Bundesländern, in denen es Japanisch nicht als Unterrichtsfach an Schulen gibt, die Sprache als Fach zu etablieren?
- Welche weiteren Möglichkeiten der Zusammenarbeit mit anderen Institutionen sehen Sie, um in Bundesländern, in denen es Japanisch nicht mehr als Unterrichtsfach an Schulen angeboten werden kann, Japanisch wieder an die Schulen zu bringen?
- Wie kann man Schulen außerhalb Nordrhein-Westfalens für Japanisch begeistern?
- Welche Didaktik liegt dem schulischen Japanischunterricht zu Grunde?
- Was sind die Ziele des schulischen Japanischunterrichtes?

2.4 オーストリア日本語教師会 / Der Verband der Japanisch-Lehrer in Österreich

マダドナーめぐみ

2.4.1 歴史

オーストリアでは、1980 年代後半から日本語教師が集まってカフェなどで小規模な情報交換会・勉強会を不定期に開いていた。1990 年初めから国際交流基金ウィーン日本文化センターの村田春文氏の助力を得て定期的に開催できるようになった。

1995 年からこの集まりに「日本語教師の会」という名を付け、年に 2 回の定期的な勉強会を始めた。2001 年に「オーストリア日本語教師会」と名を改め、今日に至っている。

設立時よりマダドナーめぐみが監事／代表／会長として会と勉強会を組織、監事は持ち回りであったが、現在はシーデンプルグ晶子が講師との連絡／会場整備など事務的なことを担っている。

2.4.2 会員

設立以来会員の入れ替わりはあるものの、常に 25～30 名が属している。ウィーンを中心に、リンツ、グラーツ、インスブルックなどオーストリア各地で教えている大学教員、大学言語センター教師、VHS 教師、中等教育機関教師、語学学校教師、個人教授など様々である。近年は外国語として日本語を教える日本語教師だけではなく、ウィーン補習授業校で継承語としての日本語を教えている教員も増えつつある。

設立当初はクロアチア、チェコ、スロベニア、スロバキアなどからの会員もいたが、現在は日本からの会員 1 名以外はオーストリア在住の会員のみで、2024 年 2 月現在で 29 名である。

2.4.3 特徴

オーストリア日本語教師会の最大の特徴として、認可団体ではなく、従って定款も総会も予算もない緩やかな集まりであることが挙げられる。また、ホームページも作成していない。年会費 4 ユーロを払えば会員となれ、入会も退会も自由である。1 回のみ参加も可能で、この場合参加費として 2 ユーロを求めている。この年会費は当初、コピー代、郵送代が大部分を占めていたが、今は主に茶菓代、講師の食事代として使用している。

2.4.4 活動

活動として年 2 回 3 月と 10 月に定例勉強会を開催している。この勉強会は講師の都合などにより時期がずれることもあるが、途切れることなく続き 2024 年 3 月の段階で 57 回を数えた。勉強会の報告として、ニューズレターを刊行している。

2000 年 7 月に第 13 回日本語連絡会議、2006 年に第 11 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（AJE との共同開催）、2009 年に第 22 回日本語連絡会議、2019 年 9 月に第 32 回日本語連絡会議を開催した。

2.4.5 勉強会

勉強会は原則として年 2 回 3 月と 10 月の土曜日の午後に講演とワークショップを行っている。2020 年、2021 年はコロナのため 1 度ずつしか開催できなかったが、途切れることなく続けられたことは幸いだった。

発足当時は会員による授業実践の相互報告と、ウィーン日本文化センターの村田春文氏の助力で招いていただいたケルン日本文化会館からの専門家の講演が中心だったが、2000 年頃から日本、アメリカ、ヨーロッパ各地からも講師を招くようになった。予算がないため謝礼、交通費、宿泊費はなし、提供するの夜の食事のみという条件で、いろいろな機関の先生にお願いしている。人脈やロコミをフルに活用し、ヨーロッパ日本語教師会のシンポジウムや日本語教育連絡会議で知り合った、こちらの教師会のニーズに伝えてくれそうな先生に、初級から中級の日本語教育をテーマに内容はお任せで講演をしていただいている。もちろんケルン日本文化会館に専門家の派遣を依頼することも多い。

勉強会の会場として、発足当初は日本文化センターの場所を借りていたが、現在はウィーン大学東アジア学科日本学の教室を使用。コロナ禍ではオンラインおよびハイブリッドで行ったこともあったが、いまは対面のみである。

2.4.6 今後

今後とも認可団体化する予定はなく、これまでと変わらない緩やかに長い活動が続けて行くつもりである。

2.5 スイス日本語教師の会 / Verein der Japanisch-Lehrkräfte in der Schweiz

ミューレバツハ名倉千春

2.5.1 スイス日本語教師の会について

2.5.1.1 設立から現在まで

「スイス日本語教師の会」は、スイスとリヒテンシュタイン在住の日本語教師の質的向上を目的に、1993 年 6 月 11 日にベルンで発足した。発足当時の会員は 28 名、2024 年月 2 月現在の会員数は 98 名となっている。

2.5.1.2 組織

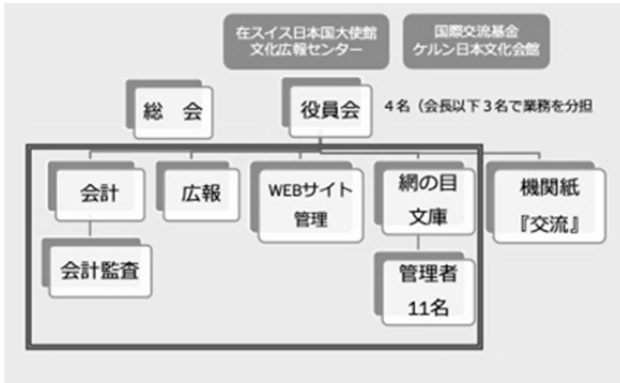


図 4 教師の会 構成

会を代表する機関として会員数名からなる役員会があり、会員の加入、退会の決定やセミナー開催の準備と遂行、その他教師の会の活動が円滑に行われるよう活動している。

役員の職務には、会長、副会長、会計係、図書係、広報係、書記、ウェブ担当があり、役員がこれらの職務を分担している。機関紙『交流』編集部は独立しているが、常に役員会と連絡を取り合っている。

スイスには、国際交流基金の事務所が設置されていないため、ケルン日本文化会館がその役割を担っている。また、在スイス日本国大使館日本文化広報センターがスイスにおける日本語教育活動の支援を行なっている。

2.5.2 会員について

今回の発表をするにあたり、会員対象にアンケートを行った。有効回答数が 45 と実施の会員の約半数であるが、現在の会員の様子を窺い知ることができた。

2.5.2.1 会員在住の言語圏

スイスの公用語には、スイスドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の 4 つがあるが、会員もスイスドイツ語圏 6 割、フランス語圏が 4 割弱、イタ

リア語圏、ロマンシュ語圏が数名、またスイス以外に在住の会員 1 名で構成されている。

2.5.2.2 スイス在住期間と教授歴（アンケートより）

在スイス歴 20 年～30 年以上を合わせると 50%以上となり、設立初期から継続している会員が多い。また、教授経験が 5 年未満の会員は約 19%（1 年未満 2.3%、3 年未満 4.5%、5 年未満 11.9%）、5～10 年の中堅が 21.4%、30 年教えている会員が多い。近年は若い層の入会も増えてきており、さらに会員に年齢や経験の幅が広がってきた。⁷

2.5.3 活動について

2.5.3.1 日本語教育能力の向上

2.5.3.1.1 セミナーの実施

主な活動としては年 2 回、日本語教育セミナーを実施している。春は 2 日間に渡り、日本を始め世界中から講師を招き、秋には 1 日のみのセミナーを行なっている。当会は国際交流基金さくらネットワークのメンバーであり、春のセミナーはほぼ毎年、国際交流基金から助成を得て運営している。

2.5.3.1.2 会員が企画する勉強会の補助

当教師会には、学習の目的や言語学習環境が様々である学習者を教えている会員が多い。そのため、年 2 回のセミナーでは取り上げにくい専門的なテーマや対象者が限定されるトピックに関する勉強会の企画を奨励しており、主催者には準備費を、参加者には交通費の一部をそれぞれ補助している。

2.5.3.2 会員の交流・情報共有

2.5.3.2.1 機関紙『交流』

設立から 4 年目の 1997 年、会員同士の交流や情報交換のために、機関紙『交流』が発行された。インターネットも SNS もなく、年 2 回のセミナーや勉強会しか会員が集まる機会がなかった当時、この『交流』が会員にとってどれほど貴重であったかは想像に難くない。企画から編集には編集部の会員が携わっており、創刊時より年一回発行されている。以前はセミナー報告書とともに郵送していたが、2015 年よりデジタル化された。

2.5.3.2.2 情報の提供、共有

会員専用のメーリングリストを利用して、会員の教育活動に役立つ情報を提供している。教師会主催のセミナーや勉強会については当然ながら、日本語教育関

7 国際交流基金実施の日本語教育機関調査（2021 年実施）より

係の研修やセミナー、会員が関わっているイベントや在日本国大使館日本文化広報センター主催のイベントに関する情報を提供している。

2.5.3.3 会員活動支援

2.5.3.3.1 網の目文庫

海外で日本語を教える際には教材や参考図書の不足が問題になるが、当教師会では、国際交流基金の助成により購入した日本語教育関係の図書を、当会独自のシステム「網の目文庫」により所有している。このシステムは、1000冊を超える図書を11のカテゴリーに分類し、11人の会員が管理者として自宅で管理するというものである。当会の会員であれば、管理者から郵便で希望の本を借りることができるこのシステムは、会発足以来、会員の大きなメリットと言える。

2.5.4 スイスの学習者について（アンケートより）

2.5.4.1 スイスにある日本語教育機関

スイスの日本語教育現場の特徴は、高校・大学といった高等教育での学習者に比べ、市中の語学学校・市民大学、または個人授業による学習者が圧倒的に多いという点である。国際交流基金が3年ごとに実施する日本語教育機関調査（2021年度）によると、スイスで日本語を学べる機関は Universität 7校、Volkshochschule 3校、Hochschule 3校、Gymnasium 7校、International school 1校、語学学校（Klubschule Migros⁸ 27校、その他の語学学校 15校）となっている。また、継承日本語を学べる学校が8校、日本人学校が1校、日本語補習校が2校ある。継承語教育に関しては、スイスが政策として継承語教育を重要視していることから、継承語に関わっている会員が多くなっている。

会員の所属している機関数は約45機関だが、成人向け生涯学習機関や語学学校に所属する会員が全体の延べ80%を占め、続いて継承語教育関係者が続き、高校や大学などの高等教育機関在職者の割合が他の教師会に比べ少ないのが大きな特徴と言える。

2.5.4.2 特徴

普段の授業で感じているスイスの学習者の特徴について質問したが、その特徴は4点にまとめられる。もちろん、会員の元で日本語を学んでいる、限られた情報ではあるが、イメージはできるのではないだろうか。

8 Klubschule Migros は Migros というスイス最大の小売グループが展開する成人教育機関で、語学だけでなく文化教養から経済、テクノロジーと幅広い分野のコースがある。スイスの全ての州にある。

くは、アニメ、ゲーム、武道、食べ物など、ちょっとしたきっかけから日本語に興味を持ち、その後「日本」や「日本語」に魅力を感じ生涯学習として日本語を学び続けている学習者も多い。

2.5.5 これから

2.5.5.1 教師会の良さ（アンケートより）

今後の教師会のあり方を考える前に、会員にとって「スイス日本語教師の会」のメリットについて聞いたところ、次のような結果となった。

表2 教師の会 良い点

選択肢	回答数（複数回答可）
セミナーや勉強会を通して、日本語教育関係に関する幅広い知識が得られる。	43（95.6%）
会員との交流を通して、刺激が受けられる。	37（82.2%）
会員と情報交換したり、相談したりできる。	34（75.6%）
授業についての知識や技能が学べる。	32（71.1%）
同じ環境の会員と知り合うことができる。	30（66.7%）
友人ができた。	23（51.1%）
網の目文庫にアクセスできる	1（2.2%）

2.5.5.2 期待されること

当教師会会員の特徴として、1) スイス全土に居住、2) 在スイス歴が長い会員が多い、3) 所属している教育機関や授業スタイルが多岐に渡っている、といった点が挙げられる。また、スイスの学習者の興味や学習目的が多様なことから、教師会の役割としては春・秋のセミナーの実施だけにとどまらない情報の提供や教育活動の支援が今後はさらに求められる。また、発足以来、会員同士のネットワークを構築し親交を深めることを重視してきたが、今度も変わらずその役割を果たしていきたいと思う。

2.5.6 最後に

近隣諸国の教師会が一同に集まるこのような機会はあまりなく、今回このシンポジウムに参加することで、ドイツ語圏の日本語教育事情を知ることができたこと、またスイス日本語教師の会を少しでも知ってもらえたことは大変有意義だった。それぞれの国、教育機関で異なる点もあるが、日本語教育に携わる者同士、これからもドイツ語圏のみならずヨーロッパの日本語教育のために協力していきたいと強く感じた。

3 ディスカッションのまとめ¹⁰

高橋淑郎

以上の内容で 5 つの教師会代表者に各会の活動を紹介してもらったのち、参加者全員でのディスカッションの時間を設けた。以下、質疑応答については Q&A の形式で、意見・提案は箇条書きでまとめる（発言者の氏名は省略）。

Q1: ほぼ同時期に各教師会が発足していて興味深い。そのころ何があったのか。

A1: 昨日の村田春文・ケルン日本文化会館館長の挨拶や大島ゲーリッシュ圭子氏の話題提供の中でも触れられていたように、1980 年代から日本の国際的存在感（特に経済を中心に）が増したのを背景としてヨーロッパでも日本・日本語への関心が高まり、日本語学習者が増加し日本語教育の場も量的に拡大した。日本語教員の側でも、仲間と情報交換したり研修したりする場として教師会のニーズが大きくなり、その帰結として、ケルン日本文化会館の支援を受けながら 90 年代初頭から次々に教師会が設立されるに至った。

Q2: ギムナジウム等において日本語科目を設置し、できれば正規科目にするためにどんなことが必要か。

A2: まずは校長のサポートを得て、課外活動でもよいので日本語学習の場を学校の中に作ること。そして同僚の教員からできるだけ支持が得られる努力をしながら、日本語学習の実績を積み重ねること。VJS もそうした教員を積極的に支援している。

Q3: ノルトライン=ヴェストファーレン（NRW）州以外の州でももっと学校教育の中に日本語科目を導入するにはどうすればよいか。

A3: 基本的には、上で答えたように学校の中に日本語科目を定着させる活動を一つずつ積み重ねていくことが重要である。

ちなみに、正式な教員として勤め始めたあとに別の州に移って学校教員になるのは制度的に難しいが、たとえば NRW 州で教員免許を取得したあと、別の州で教員として働くのは問題がない。ケルン大学の卒業生の中にも、そのようにして NRW 州以外の州の教員になっている者がいる。

Q4: JaH は会員資格の規定がかなり限定的だが、それはなぜか。

A4: ある時期、日本国内から、いわゆる「研究業績」のためだけに入会し発表するというケースが何度かあり、問題になった。その問題への対処として、入会資格は「ドイツ語圏の高等教育機関の日本語教員」となっている。

10 本章の執筆にあたり、加藤由実子氏（ミュンヘン大学）にご協力いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

Q5: コロナ禍を経て、世界中のオンライン研修会に参加できるようになった今、教師会主催の研修会の意義・すみ分けに難しさを感じているか。

A5: 教師会の研修会は、対面で直接会って話し、ともに時間を過ごすことに大きな意義がある。オンライン研修会とは別の価値を持っており、両者はそのように機能分担しており、これからも共存していくと思う。

Q6: ドイツにおける3つの会が将来、統合する可能性はあるのか。

A6: 昨日の大島ゲーリッシュ氏の話題提供でも話題になったように、もともとはケルン日本文化会館で教師研修（機関や対象者を分けない形で）が行われていたが、徐々に人数が多くなってニーズも多様化してきたため、ある時点から、機関別に研修が行われるようになり、それが後に3つの教師会に発展したという経緯がある。現在、各会ともそれなりの規模となり、それぞれ独自のニーズに対応した活動を行い、それがうまく行っている現状を見ると、将来統合してまた一つの教師会になる必要性和可能性は、今のところないのではないかな。

Q7: どうしたらオーストリア・スイスの日本語教師の方にも JaH の活動に参加してもらえるか。

A7-1: オーストリアから見ると、わざわざ国境を越えるのは大変だという感じがする。また、オーストリアでは非常勤の日本語教師が多いので、お金と時間をかけてシンポジウムに行くのが難しいことも多い。

A7-2: ドイツの会の様子がよく分からないのでなかなか腰が上らない、という感覚がある。しかし、今回のシンポジウムやパネル・ディスカッションでお互いの会のことがよく分かるようになり、交流の接点もできたので、これからは行き来がしやすくなると思う。

提案・意見：

(1) それぞれの教師会のメーリングリストにお互いの代表メールアドレスも登録したら、教師会同士の交流が深まるのではないかな。

(2) 年に1回、教師会代表者がオンラインで集まって話し合ったらどうか。

(3) 日本の「言語学系学会連合」のような交流・連携のやり方が参考になるのではないかな。

(4) 「複言語能力」は特にヨーロッパならではの、各教師会に共通する重要なテーマである。こういった話題もこれからぜひ取り上げて議論してもらいたい。

4 コメント

本パネルでは次に、ここまでの内容を受けて、国際交流基金ケルン日本文化会館日本語上級専門家（当時）の東健太郎氏に日本語教育の専門家の立場から本パネルについてコメントをいただいた。

4 コメント

東健太郎

今回、教師会パネル・ディスカッションのコメンテーターを仰せつかった際に、まず感じたのは「はて、困ったな」という不安であった。ドイツに来てまだ 2 年半の自分に各教師会の何が語れるのだろうかと考えたわけである。そこで視点を変えて、シンポジウム参加者の中で自分にしかコメントできない点は何か、それを考えてみたところ、以下の 3 点が浮かんだ。

1. JaH、VHS、VJS の会員であり、オーストリアとスイスの教師会への出講経験があること
2. マレーシア、カタール、オランダ、ドイツでの教師経験があること
3. 実際に教師会を設立・運営した経験があること

今回はこれらの視点をもとにコメントを述べる。

まず、各教師会に関するコメントである。

① ドイツ語圏大学日本語教育研究会 JaH

ドイツ語圏大学日本語教育研究会という名称の通り、ドイツ語圏の高等教育機関における日本語の教授法及び教材の研究を目的としたアカデミックな活動を行っている。シンポジウムでは、基調講演に加えて多彩な研究発表と実践報告が行われる。また、オンラインの良さを生かした情報交換会も開催されており、日頃から活発に活動が展開されている。

② ドイツ VHS 日本語講師の会 VJV

ドイツ国内で数多く開講されている VHS における日本語教育に携わっている講師への教育活動支援と情報交換の場の提供を目的にしている会である。日頃から個人もしくは少人数で活動している会員が多く、定例研修会や支部研修会では、会員同士が積極的に交流し、情報交換する姿が見られる。また、各州支部や各 VHS 主催の勉強会も数多く開催されており、出講で伺うたび、その熱意に圧倒されるばかりである。

③ ドイツ語圏中等教育日本語教師会 VJS

日本語教育を行っているドイツ語圏の中等教育機関の教師を中心に、日本語が外国語科目の一環として普及、発展していくことを目的にしている会である。会員の大半はドイツの中等教育機関で教えており、そのほとんどがドイツ人教師であり日本人教師が非常に少ない点が他の教師会と異なる。NRW 州の教員養成課程の修了生が増加してきたこともあり、比較的若い教師が多いことも特徴として挙げられる。研修会では、毎年様々なセッションが繰り広げられている。一度、参加されてみてはいかがであろうか。

④ オーストリア日本語教師会

実は 3 年間の任期中に、対面で最もお邪魔したのがオーストリア日本語教師会である。認可団体ではなく、定款も総会も予算もなく、よくぞここまで...と毎回感服させられる。4 ユーロという魅力的な年会費もさることながら、これまで 56 回の定例勉強会を切り盛りしながら、教師会を維持・継続して来られたマダドナー会長の手腕には頭が下がる。年に 2 回の定例勉強会では、非常にアットホームな雰囲気の中、様々なバックグラウンドを持った会員が集まり、熱心に情報収集と意見交換、交流を行っている。

⑤ スイス日本語教師の会

スイス日本語教師の会は非常に組織化されており、オーストリア日本語教師会とは対照的である。2023 年 9 月に秋の日本語教育セミナーに出講した際には、バレーボール部のようなチームワークのよさとオーガナイズされた運営に驚かされたものである。ベテラン、中堅、新規の会員のバランスもよく、お互いに意見交換ができる風通しの良さを感じた。網の目文庫と呼ばれる図書貸出システムや継承日本語教育関連活動が盛んなことも特徴として挙げられるであろう。

次に、客観的な視点から見たドイツ語圏の教師会についてコメントする。他の地域や国と比べてみると、ドイツのように教育機関ごとに教師会が設立されているのは非常に珍しく、国際交流基金の「日本語教師会・日本語教育関連学会一覧」(<https://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/gakkai/>)を見ても機関別の教師会があるのは韓国、中国、インドぐらいである。地域ごとに教師会が設立されている例は多いものの、教育機関ごとに設立された教師会しかないのはドイツだけであろう。一方で、オーストリアとスイスのように、一国に一教師会というのが一般的だと言えよう。

そして、教師会の役割・意義について、実際にカタールで教師会を設立した経験からコメントする。そもそも教師会とはなぜ必要なのであろうか。教師会は、「参加しなければならないもの」、「いつかは役員をやらなければならないもの」といったネガティブな印象を持っている方もいるかもしれない。私自身は、カタールで日本語教育に携わっていた際に、在カタール日本大使館とスピーチ大会を企画したことがきっかけとなり教師会を設立した経験がある。一人では実現できないことも他の先生方と協力すれば実現できるという成功体験となり、スピーチ大会や日本関連イベントの開催、勉強会及び連絡会議の実施、教材の共有、採用情報交換などを行っていた。教師会とは、個人では実現が困難なことを、協働により形にできる場なのではないだろうか。今回のパネル・ディスカッションを機に、ぜひ教師会の役割・意義についても再考してみていただきたい。

最後に、教師会間の連携の可能性について私見を述べる。今回のパネル・ディスカッションで初めて他の教師会の具体的な活動を知ったという方も多いのでは

ないだろうか。立場上、「他の教師会ってどんな感じなんですか？」といった質問を受ける機会が多い。同じドイツ語圏にありながら、コロナ禍ということもあって、なかなか交流する機会がなかったのが現状のようである。シンポジウム参加者の中にも複数の教師会に在籍している方もいらっしゃるが、少数であろう。各教師会が交流することで、情報共有だけでなく、イベント共催や人材交流、教材開発等の可能性が膨らむのではないかと考える。今回のパネル・ディスカッションを機に、各教師会が意見交換、情報共有を行って相互理解を深めていくことで、オーストリア・スイス・ドイツの日本語教育が益々盛り上がり、発展していくことを心より願っている。

5 参加者の声

高橋淑郎

当日の内容は以上である。では、本パネルは参加者にどのようなインパクトを与えたのだろうか。本章では、パネル・ディスカッション終了後、参加者全員を対象に行ったアンケート調査の結果から本パネルについての感想・コメントを集計して紹介する。

この調査は、本パネルが行われた 3 月 2 日（土）の夕方に行った「グループ活動：ふりかえり」の一環として実施されたものである。この活動では「ここまでのシンポジウムの内容を通して得られた知識・気づき、あるいは理解が深まったことをグループのメンバーと共有してください」という指示に基づいて話し合ったのち調査票の質問に各自が回答した。具体的には、本シンポジウムの参加者全員を対象に、オンラインの調査票に各自で直接アクセスして回答してもらった。回答は匿名で提出・回収された。調査期間は 3 月 2 日（土）16:45～3 月 3 日（日）11:00 である。調査票の質問を以下に示す（質問 8 以降は本パネルに関係のない質問なので省略する）。

表 3 「グループ活動:ふりかえり」の調査票(一部)

番号	質問 [回答選択肢]
1	グループ活動「ふりかえり」に参加しましたか。[はい／いいえ]
2	どのぐらい日本語教育に関わっていますか。 [0 年～半年未満／半年以上～3 年未満／3 年以上～10 年未満／10 年以上]
3	ドイツ語圏の 5 つの教師会のどれか 1 つ以上の会員ですか。 [はい／いいえ]
4	JaH のシンポジウムにはどのぐらいの頻度で参加していますか。 [今回初めて参加した。／ほぼ毎年参加している。／毎年ではないが、何回か参加したことがある。]

5	①今回のシンポジウムを通して、「ドイツ語圏の日本語教育」の全体像と多様性について、知識、気づき、より深い理解などが得られましたか。 [はい。／どちらかと言えば、はい。／どちらとも言えない。／どちらかと言えば、いいえ。／いいえ。] ②具体的には？（回答は自由記述）
6	①今回のシンポジウムを通して、教師会が果たす役割について、知識、気づき、より深い理解などが得られましたか。 [はい。／どちらかと言えば、はい。／どちらとも言えない。／どちらかと言えば、いいえ。／いいえ。] ②具体的には？（回答は自由記述）
7	①今回のシンポジウムを通して、教師会がご自分にとって持つ意義について、気づきやより深い理解が得られましたか。 [はい。／どちらかと言えば、はい。／どちらとも言えない。／どちらかと言えば、いいえ。／いいえ。] ②具体的には？（回答は自由記述）

5.1 回答者の背景

調査対象はシンポジウムの参加者全員（57 名¹¹）であるが、実際の回答者数は 47 名¹²であった。日本語教育歴（質問 2）は「10 年以上」が 83%¹³（39 名）、「3 年以上 10 年未満」が 15%（7 名）であり、また、「ドイツ語圏の 5 つの教師会どれか 1 つ以上の会員ですか。」（質問 3）に 87%（41 名）が「はい」と答えていた。JaH のシンポジウムへの参加頻度（質問 4）としては、49%（23 名）が「ほぼ毎回」、36%（17 名）が「毎年ではないが何回か」、15%（7 名）が「今回初めて参加した」と回答した。

以上から、本アンケート回答者の大多数が、ドイツ語圏で活動し、いずれかの教師会に所属している¹⁴中堅以上の日本語教師であること、また、JaH のシンポジウムに定期的に参加している回答者が多いが、今回が初めてという回答者も一定数いるということが確認できる。

11 シンポジウムには 62 名の参加者がいたが、そのうち 5 名は在外公館の方などの来賓であり、シンポジウムの実質的なプログラムには参加していないので、この 5 名を除いた 57 名を本稿では「シンポジウムの参加者全員」とする。

12 「ふりかえり」活動に参加しなくても調査への回答は可能であったが、実際には回答者 47 名中 46 名が「ふりかえり」活動に参加していた（質問 1 への回答結果から）。

13 以下、パーセントの数値は小数点第一位を四捨五入して示す。

14 シンポジウム参加者全員 57 名のうち 44 名が JaH 会員であるので、ここの回答者の大半も同様に JaH 会員だと推測される。

5.2 質問5：ドイツ語圏の日本語教育の全体像と多様性

本パネルに関連する質問は3つあり、その第一が質問5「今回のシンポジウムを通して、『ドイツ語圏の日本語教育』の全体像と多様性について、知識、気づき、より深い理解などが得られましたか」である。これに対する回答は「はい」が79% (37名)、「どちらかと言えば、はい」が21% (10名)で、全員が肯定的な評価をしている。

ただし、これらの回答のすべてが必ずしも本パネルに直接対応しているとは限らない。そこで、上記回答についての詳細を尋ねた「具体的には？」という質問への回答（自由記述）を見ると、提出された合計41名分の回答のうち、29名の回答が本パネルに言及しており、そのほぼすべてに共通していたのは教師会間の違いや多様性への気づきに関するコメントであった(27名)¹⁵。さらに、回答の中には、違いや多様性への気づきをふまえた上で、新たな疑問・課題・提案を述べるものもあった(5名¹⁶)¹⁷。

このことから、本パネルはドイツ語圏の日本語教育の全体像と多様性を理解する上で十分なインパクトがあったとすることができる。特に注目すべきは、ドイツ語圏で長年日本語教育に従事し、教師会にも所属してシンポジウム等にも定期的に参加している日本語教師であっても、必ずしも他の教師会の活動やドイツ語圏の日本語教育の全体像までは把握しきれないという点である。アンケートの結果は、そのような日本語教師がドイツ語圏の日本語教育に関して新たな知識・認識を獲得する場として、本パネルがうまく機能したことを示している。

15 回答の例：「ドイツ語圏といっても国や会によって様々で面白かったです。」、「特に多様性を感じることができました。ドイツ語圏にもこんなに色々な形の教師会があるのだということを知りました。」

16 「違いや多様性への気づき」が27名、「疑問・課題・提案」が5名で合計32名となり、実際の回答者数29名と一致しない。これは3名の回答に両方の記述が見られ、それぞれで別に集計したためである。

17 回答の例：「もう一步進んで、『自分たちはどんな教師会にしたいか』について考える時間があつたらよかったなと感じました。」、「連携を具体的に進められるとよい。ドイツ語圏以外の教師会で複数に分かれていない事例があるなら、何が違うのか、会員が教師会に何を求めているのか、知りたいと思った。」、「[引用者注：教師会どうしの連携の可能性として]たとえば、同じ教科書を使ってる人が集まって共通の教材を作るとかはどうか。（例えばみんな日は機関に関わらず使ってる人が多いので、機関を超えて仕事ができるのでは?）」、「ドイツで実際教えられている先生方が内側から話題提供してくれた点が良かったと思います。ただ、組織運営に関する議論よりは教育上の課題（アーティクレーションの問題など）をもっと聞きたかったです。特に複言語主義との関連やCERF関連の話題がもっと入ってても良かったのではないかと思います。」

5.3 質問 6 : 教師会の役割

第二は質問 6「今回のシンポジウムを通して、教師会が果たす役割について、知識、気づき、より深い理解などが得られましたか」という質問である。これに対する回答は「はい」が 64% (30 名)、「どちらかと言えば、はい」が 32% (15 名)、「どちらとも言えない」が 4% (2 名) で、圧倒的に肯定的な回答が多かった。

「具体的には？」という質問へは 32 名から回答 (自由記述) があり、その中で最も多かったのは、教師会が果たす役割の具体的な内容についてのコメント (17 名) であった。内訳は、教師会を「交流・協働」の場ととらえるもの¹⁸ (13 名) と「情報交換」の場ととらえるもの¹⁹ (7 名²⁰) であった。「交流・協働」という回答がこれだけ多かったのは、本パネルで実際に各教師会ともに会員間の交流・協働を重要な柱として活動している実績を目の当たりにした (第 2 章参照) ことに加えて、全体ディスカッション (第 3 章、特に Q5 参照) および東氏の、経験に基づいた説得力のあるコメント (第 4 章参照) のインパクトも大きかったのではないかと考えられる。

次に多かった回答のタイプは、教師会によってさまざまな違いがあることへの気づき²¹ (5 名) と、新たな疑問・課題を述べた回答²² (5 名) であった。その他、

-
- 18 回答の例：「オンライン研修会が多くなった中、教師会は勉強するところというより、人と繋がる場所という認識が強くなった。」、「一人ではできないことも志を同じくする人と出会うことで、できるようになったり、勇気づけられたり、インスピレーションを得たりすることができることが実感できた。」、「東さんのお話」
- 19 回答の例：「同じ分野で働く人と直に会って情報交換したり、再会を喜んだりする場として、大きな役割がある。」、「同じ状況にいる教師と教授法や授業内容だけでなく職場環境などについても情報交換ができること。」、「シンポジウムや勉強会を通じて、日本語教育に関する課題や問題意識を共有できる。」
- 20 13 名と 7 名を合計すると 20 名となり、実際の総数 17 名と一致しないが、これは「交流・協働」と「情報交換」両方にふれた回答が 3 件あるためである。
- 21 回答の例：「同じ日本語教師の会でも各会によって特色があり、それぞれ共通の課題もあれば、各会にしかわからない悩みもあるのだと思いました。」、「自分がかかわっている教師会以外の教師会の機能 (教材開発・交換留学サポート・教材の貸し出しなど) があることに気づきがあり、新鮮でした。」、「それぞれの会が志をもって、よりよい授業ができるように、日本語学習者が学びやすく続けていけるよう取り組んでいられることが知れました。」
- 22 回答の例：「教師会に入って、みんなと一緒に何か計画して、一人ではできない目的にも達成できます。しかし厳密に言って JaH は教師会ではなく、研究会なので、ちょっと違うのではないかと気付きもありました。」、「ギムナジウムの日本語教育と大学の日本学が協力できる事はあるかもしれない。」、「セミナーを開催する際に対象者 (新米教師？ベテラン教師？) に応じて、テーマを考えなければならない。」

考えるためのよい機会となったという回答²³や、すでに分かっていたことを再確認できたという回答²⁴もそれぞれ1名ずつあった。

以上から、参加者のほとんどにとって、本パネルは教師会の具体的な役割を認識したり、それについてより深く考えたりするための有意義な機会であったと言えることができる。

5.4 質問7：自分にとっての教師会の意義

第三は質問7「今回のシンポジウムを通して、教師会がご自分にとって持つ意義について、気づきやより深い理解が得られましたか」である。回答は、「はい」が64%（30人）、「どちらかと言えば、はい」が28%（13人）、「どちらとも言えない」が9%²⁵（4人）であった。肯定的な回答を合計すると91%²⁶（43人）となり、前の2つの質問への回答と同様に、ほとんどが肯定的な回答であった。

自由記述の回答者は27名で、回答の大半は、自分にとって教師会が持つ意義の具体的な内容を指摘するコメントであった（21名）。その内容を見ると、基本的には質問6の回答と重なる部分が多く²⁷、「情報交換」（11名）²⁸と「交流・協働」（10名²⁹）³⁰を指摘したコメントが最も多い。一方、質問6の回答ではほとんど見られなかった「精神的な支え」を指摘した回答³¹も4名分³²あった。

23 「役割について、まだちゃんと考えることができていません。教師会についてもっと深く考えるには、もう少しこれをテーマにした話し合いが必要だなと感じました。でも、考えるきっかけ、材料はたくさん得ることができました！」

24 「気づいたというか、分かっていたことを再確認できた。」

25 ここまでのパーセントを合計すると101%になってしまうが、これは本章で小数点第一位を四捨五入して処理しているためである。

26 「はい」（64%）と「どちらかと言えば、はい」（28%）のパーセントの合計が92%になってしまうのも、前注で説明したとおり小数点第一位を四捨五入しているためである。

27 実際に、「6と同じ」（引用者注：「質問6」のことと解釈される。以下同様）、「6で答えたことと同じ。」、「5に同じ」（引用者注：「6」を誤って「5」と書いたのではないかと推測される）という回答があった。

28 回答の例：「他の機関と比べることで、自分の機関をより客観的に捉えなおすことができるし、教材や授業内容に関して有益な情報交換ができる。」、「普段一人で教えているので、他大学、各教師の取り組みや、考えていることがわかる貴重な機会になっている。」、「はい。同じ現場で働く方々と意見や情報交換ができることはとても有意義だと思います。今、JaHかVHSの会のどちらに参加しようか、と考えています。」

29 両方のポイントを含む回答が1名分あり、この回答はそれぞれで別に集計されている。

30 回答の例：「人に会うため。」、「教師会は同じ興味と関心のある仲間と一緒に何かを実現できる場所。」、「様々な人とつながりができる大切な場であることを再認識できました。」

31 回答の例：「同じような環境で仕事をしている人と交流できることで、精神的な支えになります。」、「毎年シンポジウムに参加すると、リフレッシュと、モチベーションの再刺激になります。同じような境遇の知り合いも増えてうれしいです。」、「私にとつ

以上から、参加した大半の日本語教師にとって、本パネルは自身にとっての教師会の意義を具体的に実感・再認識するための有意義な機会であったと見ることができる。

6 まとめ

高橋淑郎

本稿では、第 30 回 JaH シンポジウムにおいて開催された教師会パネルディスカッションの内容、および、それについての参加者の声を紹介した。本章では「まとめ」として、本パネルの意義を評価し、残された課題を述べる。

まず、本パネルは、歴史的に見て画期的なイベントであった。第 1 章で紹介したように、ドイツ語圏で活動する全ての日本語教師会の代表者が一堂に会して情報・意見交換したのは今回が初めてであった。本パネルがきっかけとなって、今後、教師会どうしの交流が深まり継続していくことは、ドイツ語圏における日本語教育全体の発展にも直結するはずである³³。

次に、本パネルは、ドイツ語圏における日本語教育の現在の姿を具体的に提示するという意味でも大変有意義であった。第 5 章で見たように、たとえドイツ語圏で長年日本語教育に従事していても、必ずしもこの地域全体の日本語教育の姿を把握しているとは限らない。本パネルはそうした情報の穴を埋め、ドイツ語圏で活動する日本語教師により広い視野を提供する上で非常に有益であったことが事後アンケートからも明らかになった。

当該地域の日本語教育については、各教師会のホームページ、国際交流基金による「日本語教育 国・地域別情報」³⁴やケルン日本文化会館開館 50 周年記念誌

ては一年に一度の『同窓会』であり、『悩み相談』の場でもあります。」、「共感ができる場合があると嬉しい。」

32 この 4 名の回答のうち 3 名分は、「交流・協働」または「情報交換」へのコメントも含んでおり、それぞれ別に集計されている。

33 本パネル後、実際に教師会どうしの本格的な交流が始まったことを付記しておきたい。まず、ディスカッションの中で出されたアイデアを取り入れて、シンポジウム直後から教師会代表者どうしのメールアドレスの共有とやりとりが始まったり、各教師会の会員用メーリングリストに他の教師会代表者のメールアドレスも登録し各会の活動に関する情報が相互にリアルタイムでシェアできるようになったりした。また、JaH では、これまで JaH 会員限定であったオンラインの情報交換会に他の教師会会員も参加できるようになり、実際に多くの方が参加している。さらに、ケルン日本文化会館の呼びかけで、これらの 5 教師会とケルン日本文化会館の合計 6 団体が情報交換を行う場として 2024 年の夏に「ドイツ語圏 5 教師会代表者会議」が立ち上げられ、年に一回のペースで定期的開催されている。このように、個々の会員から教師会代表者までのさまざまなレベルでの定期的な相互交流が現実のものとなっている。

34 本稿執筆時の最新情報は以下の 2023 年度版である。 https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2023/index.html#w_europe (2025 年 9 月 22 日アクセス)

(第 2 巻)³⁵ など既刊・既存の資料からでも比較的新しく、信頼できる情報を得ることができるが、本パネルにおける情報提供の独自性は、まず「会員の背景・数」・「発足年」・「ふだんの活動」・「うまく行っている点と課題」という共通のトピックについて紹介してもらうことで教師会間の共通点と相違点を分かりやすく提示したこと、最新調査に基づく詳細な情報が含まれていること、そして代表者の率直な感想・見解が示されていることである。

第三に、本パネルは教師会の役割、および、そこに参加する日本語教師一人ひとりにとっての意義を再認識・再考する機会としても大変有意義であった。特に、教師会が「交流・協働」を通したエンパワーメントの場であるということも多く、参加者に改めて強く実感してもらえたのは大きな収穫であった。今後、各教師会の活動に積極的に参加する会員が増え、それぞれの会の活動がさらに充実していくことが大いに期待される。

一方で、第 1 章で紹介した本パネルの目的のうち、「複数の教師会に共通する課題と、各地域・機関に固有の課題を整理すること」、および、「そうした課題に対して、これから、複数の教師会がどのように連携・協力、あるいは、役割分担するのがよいかを探ること」という 2 点については、今回、十分に深めることができなかった。これらの課題については、今後の教師会間の継続的な交流の中で、そして、将来行われるかもしれない次の教師会パネル・ディスカッションで取り組まれていくことを期待したい³⁶。

資料：各教師会のホームページ（いずれも 2025 年 9 月 22 日アクセス）

ドイツ語圏大学日本語教育研究会 / Japanisch an Hochschulen e.V. (JaH)
<https://www.japanisch-an-hochschulen.de/>

ドイツ VHS 日本語講師の会 / Verein zur Förderung des Japanisch-Unterrichts an VHS e.V. (VJV) <https://vhsjapanisch.jimdofree.com/>

ドイツ語圏中等教育日本語教師会 / Verein der Japanischlehrkräfte an weiterführenden Schulen im deutschsprachigen Raum e.V. (VJS) <https://vjsonline.de/de/index.html>

オーストリア日本語教師会 / Der Verband der Japanisch-Lehrer in Österreich（公式サイトなし）

スイス日本語教師の会 / Verein der Japanisch-Lehrkräfte in der Schweiz
<https://www.kyoshi-kai.ch/index.php>

35 ケルン日本文化会館（編）『ケルン日本文化会館開館 50 周年記念誌 第 2 巻 ドイツ語圏における日本語教育』（国際交流基金 ケルン日本文化会館、2000 年）
<https://co.jpfg.go.jp/jp/service/publikation/festschrift-50-jahre-jki/>（2025 年 9 月 22 日アクセス）

36 いくつかの具体的な論点・課題はすでに、全体ディスカッションや事後アンケートの回答で提示されている（第 3 章の特に「提案・意見」、第 5 章の 5.2 節の注 17、および 5.3 節の注 22 参照）。

付記

本パネルを含む第 30 回ドイツ語圏日本語教育研究会シンポジウムは国際交流基金さくらネットワーク助成を受けて開催されました。ご支援に深く感謝申し上げます。

また、「ドイツ語圏 5 教師会代表者会議」（注 33 参照）について、国際交流基金ケルン日本文化会館日本語上級専門家の菊岡由夏氏から情報提供をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。